様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５０７

研究課題名（和文）反奴隷制文学の諸相ー「もう一つのアメリカン・ルネサンス」

研究課題名（英文）Various Phases of Antislavery Literature--Another American Renaissance

研究代表者
野口　啓子（Noguchi, Keiko）

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：６０１８０７１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀中葉のアンテベラム期に次々と発表された奴隷制を巡る言説を一つの文学ジャンルとして捉え、それが「もう一つのアメリカン・ルネサンス」を形成した可能性を探ったものであるが、本研究を通して反奴隷制文学がこの時代のみならず、独立革命後からアメリカン・ルネサンス期を経て、南北戦争後には「自由と隷属」という普遍的なテーマに形を変えて、現代文学の「主流」へと受け継がれた系譜が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで部分的にしか研究がなされていなかった奴隷制反対の様々な言説を、「反奴隷制文学」という一つの文学ジャンルとして捉えたことで、文学としての意義を付与できたこと、また、その「反奴隷制文学」が当時の政治のみと結びついた一過性の現象ではなく、「自由と隷属」という普遍的なテーマに形を変えて、現代文学に受け継がれていることを明らかにできた意味は大きい。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to analyze various antislavery discourses that permeated the antebellum American society and to examine a possibility that they formed "another American Renaissance," by integrating those discourses into a literary genre. The results of this project makes it clear that the antislavery discourses can be regarded as a literary genre and that it has established a literary tradition not limited to the mid-nineteenth century but extended to the modern American literature in terms of "freedom and bondage."

研究分野：19世紀アメリカ文学

キーワード：反奴隷制文学　アメリカン・ルネサンス　ハリエット・ビーチャー・ストー

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 24 年度から 26 年度に行った先行研究（基盤研究（C）、テーマ：ハリエット・ビーチャー・ストーと反奴隷制文学）の発展的研究である。この先行研究では、ストーの『アンクル・トムの小屋』を他の作品、とりわけスレイヴ・ナラティヴと比較検証し、19 世紀中葉に盛んに発表された、ストーがそれらスレイヴ・ナラティヴに与えた影響、また逆にスレイヴ・ナラティヴから受けた影響を双方向的に捉えた。その過程で、この時代に小説やエッセイ、演説やパンフレット等で発表された夥しい奴隷制をめぐる言説が一つの文学ジャンルを形成したばかりでなく、いわゆる「アメリカン・ルネサンス」に匹敵する文学的高まりをみせた可能性が浮上した。これをさらに掘り下げて考察しようとしたのが、本研究「反奴隷制文学の諸相――「もう一つのアメリカン・ルネサンス」である。（なお、サブタイトルの「もう一つのアメリカン・ルネサンス」は、女性作家を主とした「感傷小説」が大きな文学運動を形成したと捉えたジェーン・トムキンズの『センセーショナル・デザイン』第 4 章のタイトルを参照している。）

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期に次々と発表された奴隷制をめぐる言説を一つの文学ジャンルとしてとらえ、それらが Ｆ・Ｏ・マシセンのいわゆる白人男性中心の「アメリカン・ルネサンス」に対し、「もう一つのアメリカン・ルネサンス」を形成していた可能性を探るものである。

そのために、反奴隷制文学の間テクスト性を視座に入れつつ、スレイヴ・ナラティヴや小説、政治的プロテスト、演説等を包括的に取り上げ、その諸相と系譜を明らかにすること、また、この明示化の試みを通じて、反奴隷制文学をアメリカ史の中に位置づけ、それにより従来のアメリカ文学におけるアメリカン・ルネサンスの古典的枠組みの再編をめざした。

３．研究の方法

研究全般にわたり、伝統的な文学ジャンルの枠組みにとらわれることなく、小説やエッセイ以外にも、演説や雑誌、パンフレットや小冊子なども包括的に取り入れ、その上で、それらにおける間テクスト性に留意しながら、反奴隷制の言説を丁寧に検証した。3 年間の研究をそれぞれ年度ごとに、ストーに影響を与えたと思われる「初期反奴隷制文学」（平成 28 年度）、ストーの『アンクル・トムの小屋』とスレイヴ・ナラティヴや主に南部で出版された奴隷制擁護の文学との比較検証（平成 29 年度）、ストーとメルヴィルを中心としたいわゆる「アメリカン・ルネサンス」の作家との比較検証（平成 30 年度）に分けて発展的に行った。

（平成 28 年度）

本研究において「初期反奴隷制文学」と位置づけている 1850 年代以前の奴隷制をめぐる言説の中心となるのは、デイヴィッド・ウォーカーやリディア・マリア・チャイルドなどによる直接的なプロテスト文学とリチャード・ヒルドレスに代表されるスレイヴ・ナラティヴの枠組みを借りた反奴隷制小説、ならびにフレデリック・ダグラスに代表されるスレイヴ・ナラティヴの形をとった「自伝」である。これら 3 つの（文学）様式の相互影響を検証し、そこに共通してみられる「共和国の理念」とそこからの離反というレトリックの抽出を試みた。この試みのために、以下の作業を行った。

（１）共和国の理念となるジェファソンの「独立宣言」や『ヴァージニア覚書』、合衆国憲法などにおけるアメリカ民主主義のビジョンの構築とその矛盾や限界について吟味する。

（２）ウォーカーの『訴え』（1829）におけるアメリカ民主主義批判をジェファソンの著作と比較検証しながら考察する。

（３）チャイルドの『訴え』（1833）をウォーカーの『訴え』と比較検証しながら、人種・ジェンダー・による差異に留意しつつ、「共和国の理念」とそれからの逸脱という言説を共通項として炙り出す。

（４）アメリカにおける最初の反奴隷制小説とされるヒルドレスの『奴隷』（1836）を考察し、上記２，３と比較検証する。

（５）スレイヴ・ナラティヴの傑作とされるダグラスの『ナラティヴ』（1845）を上記２～４と比較検証し、共通するレトリックや言説について考察する。

（平成 29 年度）

2 年目の平成 29 年度は、ハリエット・ビーチャー・ストーの『アンクル・トムの小屋』に反論する形で書かれた、多数の奴隷制擁護の物語群との比較研究を中心に、この時代の中核を占める反奴隷制文学と奴隷制擁護の文学との相互作用を検証し、その議論をとおして、後者が前者のレトリックの発展とそれに伴う反奴隷制文学の変容に寄与したことを検証する。この目的のために以下の作業を行った。

（１）奴隷制擁護の文学として、主に Mary Eastman の *Aunt Phillis's Cabin* (1852) Caroline Rush の *The North and the South* (1852)を取り上げ吟味する。その際に、多数の奴隷制擁護の小説を詳細に論じた Thomas Gosset の *Uncle Tom's Cabin and the*

American Culture を参照する。
（２）ストーの『アンクル・トム』が女性作家の登場を促した可能性を吟味する。
（３）奴隷制擁護の文学の多くが、ストーと同じ家庭小説の枠組みを用い、キリスト教精神を強調している点に注目し、どちらにも共通のドメスティック・レトリックが見られることを確認する。
（平成 30 年度）
最終年度は、メルヴィルを中心とする白人男性作家による反奴隷制小説と、ダグラスに代表されるスレイヴ・ナラティヴとストーに代表される反奴隷制小説との間の相互影響と相違点の見極めを遂行するために、ルネサンス期の主要な作家の一人で、そのほとんどの作品に奴隷制に関わる言説を含むメルヴィルに焦点をあて、これら三者が交錯する地点を探る。この目的のために、以下の作業を行った。
（１）前年度に考察した、人種的により対等でラディカルな黒人像を、奴隷制を正面から取り上げたメルヴィルの『ベニト・セレノ』（1855）で検証する。上記と併せて、同じ奴隷の反乱を扱ったダグラスの「ヒロイック・スレイヴ」（1852）、またこれらの作品のもととなったナット・ターナーの反乱や、アミスタッド号事件、クレオール号事件の資料にもあたり、それぞれの作品において史実がどのように虚構化され、どのような言説が紡ぎ出されているか検証する。またダグラスの自伝（1845、1855）が及ぼした影響も併せて考察する。
（２）上記の作品とストーの『ドレッド』（1856）を比較し、そこに共通して見られる反抗的な黒人像の特長を吟味する。

上記の作業を通して、「奴隷の反乱」を扱った作品に共通して見られる、より対等で反抗的な黒人像が、当時広く浸透していた人種主義への批判としてばかりでなく、ナショナリズムの言説とともに、「自由と隷属」というより普遍的なテーマを提示することで、アメリカン・ルネサンスのもう一つの横断図を示し得た可能性を明らかにし、その再編を試みた。また、今後の発展的課題として、このテーマがアメリカ文学を貫く水脈となり得る可能性も併せて考察した。

４．研究成果
上記 3 年間の本研究により以下のことが明らかとなった。
（１）初期反奴隷制文学については、共和国の理念、とりわけジェファソンの「独立宣言」や『ヴァージニア覚書』、合衆国憲法を拠り所として奴隷制反対の言説が構築されていることが明らかになった。この点は『アンクル・トムの小屋』をはじめとする反奴隷制小説においても引き継がれていく。また、デイヴィッド・ウォーカーの『訴え』におけるジェファソン批判の根拠を、当時の黒人が置かれた社会的状況に照らし合わせて明らかにすることができた。これらの研究成果は、主として “Reading Slavery in *Adventures of Huckleberry Finn*”、(*The Tsuda Review*、No. 63、2018)において発表した。
（２）『アンクル・トムの小屋』が黒人によるスレイヴ・ナラティヴや小説に影響を与えたばかりでなく、南部の奴隷制擁護の文学、とりわけ女性作家の誕生を惹起したことが明らかとなった。この成果の一部はアメリカ学会の年次大会（2017 年）で発表すると同時に論文としても発表した（「ドメスティックな女性たちの政治力――ハリエット・ビーチャー・ストーの『アンクル・トムの小屋』を中心に」、『津田塾大学紀要』、No. 50、2017）。
（３）本研究の総括として、これまで見てきたスレイヴ・ナラティヴやストーを中心とした反奴隷制小説をいわゆる「本流」とみなされる白人男性作家たちの反奴隷制の言説と比較検証し、その相互作用を吟味した上で、反奴隷制文学が「もう一つのアメリカン・ルネサンス」として再編可能かどうか考察した。その結果、次のことが明らかになった。第一に、ダグラスに代表されるスレイヴ・ナラティヴが、ストーの『アンクル・トムの小屋』に影響を与えつつ、さらにその後に発表された「ヒロイック・スレイヴ」が『アンクル・トム』に反発しながらも影響を受けていること、またダグラスの「反抗的黒人ヒーロー」の数年後に書かれたストーの『ドレッド』がダグラスへのリスポンスとなっていることが明らかとなった。第二に、上記の作品における反奴隷制の言説がハーマン・メルヴィルの『ベニト・セレノ』に反映されていること、文学史上、峻別されたこれらの作品群に間テクスト性が見られることから、「反奴隷制文学」を「もう一つのアメリカン・ルネサンス」として再編する可能性があることが明らかとなった。第三に、上記の文学史的再編が 19 世紀中葉の一時的現象ではなく、現代アメリカ文学にも引き継がれた伝統として位置づけることも可能であることが、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』における反奴隷制の言説を検証することで確認された。

奴隷制をめぐるおびただしい言説を、その間テクスト性を視座に入れて、共通項を抽出し、反奴隷制文学を一つの文学ジャンルとして明示できたことは、この分野における貢献といえよう。また、それをアメリカン・ルネサンスの文学とも比較したうえで、それに比肩しうる「もう一つのアメリカン・ルネサンス」と位置づけられたことも、大きな成果であった。加えて、アメリカン・ルネサンスのみでなく、その後の現代文学につながる可能性が浮上したことは、今後の研究を示唆するものとして、望外な成果であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 野口啓子（Noguchi, Keiko） “Reading Slavery in *Adventures of Huckleberry Finn*”、*The Tsuda Review*、査読無、No. 63、2018、1-20.

② 野口啓子「ドメスティックな女性たちの政治力――ハリエット・ビーチャー・ストーの『アンクル・トムの小屋』を中心に」、『津田塾大学紀要』、査読無、No. 50、2017、67-79.

③ 野口啓子（Noguchi, Keiko）“David’s Walker’s ‘Appeal’: The Emergence of Antislavery Literature”、*The Tsuda Review*、査読無、No. 61、2016、1-19.

〔学会発表〕（計 1 件）

① 野口啓子「ドメスティックな女性たちの政治力――ハリエット・ビーチャー・ストーの『アンクル・トムの小屋』を中心に」（部会「女性と政治権力」（司会：高尾直知）、アメリカ学会第 51 回年次大会、2017 年 6 月（於： 早稲田大学）。

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：野口　啓子（研究代表）

ローマ字氏名：Noguchi, Keiko

所属研究機関名：津田塾大学

部局名：学芸学部

職名：教授

研究者番号（8 桁）：60180717